

中国語のモーダルマーカの文法化に関する一考察

—「应该yīnggāi」と「要yào」の例—

玉地 瑞穂*

Rethinking of grammaticalization of Chinese modal markers:

—The cases of yīnggāi and yào—

Mizuho Tamaji

Abstract

Due to the existence of deontic-epistemic polysemy in Chinese and non-existence of the polysemy in Japanese, the mapping correspondence of modal markers in Chinese and Japanese is normally 1 : 2. These competed form-meaning mappings in both languages are assumed to be interference on the Chinese learners' acquisition of Japanese modal markers. However, the result of a study regarding L2 acquisition indicated that the grammaticalization of Chinese modal markers differs in each modal marker. This study demonstrates the direction of grammaticalization : yīnggāi is deontic > epistemic, whereas yào is deontic/epistemic. This study also discusses that the result of Chinese learners' acquisition of Japanese modal markers and their ways of cognition reflecting the grammaticalization.

キーワード : 多義性, マッピングの対応, 文法化, 第2言語習得, 認知

Key words : polysemy, mapping correspondence, grammaticalization, L2 acquisition, cognition

1. はじめに

機能主義文法に基づく言語習得理論であるForm-Meaning Connections (FMCs) (Van Patten et al. 2004) は, 言語習得の基本的な局面は言語の形式と意味・機能のマッピングの仕方の習得であると考え。したがって, 第1言語と第2言語ではマッピングの異なる文法項目の習得において, すでに習得した第1言語のマッピングが負の転移として現れると考えられる。

言語類型論的モダリティ研究では, 「根源的」モダリティと「認知的」モダリティの間

* 提出年月日2006年1月10日 高松大学経営学部経営学科講師

で多義性が見られるのは言語間に共通の現象と捉えられている。この現象は中国語には見られるが、日本語には見られない。つまり、中国語においてはこの2つのモダリティを表す語彙形式（モーダルマーカ―）が1つであるのに対し、日本語では2つの形式で表されるので、習得が難しいと考えられる。このようなモーダルマーカ―の例として中国語の「应该 yīnggāi」に対する「べきだ」と「はずだ」、「要 yào」に対する「なければならない」と「にちがいない」が挙げられる。

筆者は、中国人日本語学習者の「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」というモーダルマーカ―の習得を通して、学習者がどのように第1言語と第2言語のマッピングが異なる文法項目を習得していくかを分析した。その結果、マッピングの対応が同じものでも習得過程が異なっているという知見を得た（玉地・堀江、発表予定）。

習得順序と文法化の経路の間にはパラレルな関係が見られることが報告されている（Slobin, 1994）。したがって、中国語と日本語では1対2の対応関係があるモーダルマーカ―でも習得順序が異なるということは、これらのモーダルマーカ―の文法化の経路が異なっていることを意味していると考えられる。

本研究の目的は、「应该 yīnggāi」と「要 yào」の文法化の経路を日本語からと中国語への翻訳文学作品における日本語のモーダルマーカ―の使用状況から検証することである。本研究の構成は以下の通りである。第2節では、日本語と中国語のモーダルマーカ―の形式と意味・機能のマッピングの違いを認知言語学的観点から説明し、第3節ではこのマッピングの違いという観点から分析した中国人日本語学習者のモダリティ習得の研究の結果と中国語のモーダルマーカ―の文法化の経路を検証する必要性について述べ、第4節では研究方法及び結果の報告、第5節で文法化の経路から見た習得研究及び認知過程についての考察を行うこととする。

2. 日本語と中国語のモーダルマーカ―の形式と意味・機能のマッピングの違いに対する認知言語学的分析

モダリティ（Modality）とは話者の言表態度を表す言語表現であり、Palmer（2001）によれば文法形態で表現されるムード（Mood）と法助動詞などの語彙形態によって表現されるモーダルシステム（Modal system）から成り立っている。モーダルシステムは必然性と可能性を含む変異系で、モーダルシステムを構成するモダリティには文中の主語となる

人物の意志・能力を表す「動的」モダリティ (Dynamic modality), 主語となる人物の行為にある行為の遂行に対する許可を与えたり義務を課したりする「根源的」モダリティ (Deontic modality), 話者の命題の真実性に対する判断を表明する「認識的」モダリティ (Epistemic modality), 話者の命題の事実性に対する証拠性を表す「証拠性」のモダリティ (Evidential modality) という4つのモダリティから成る。これらのモダリティを表現する語彙形態をモーダルマーカ (Modal marker) と呼ぶが, 1つのモーダルマーカが2つ以上のモダリティとしての意味・機能を持つ多義性 (Polysemy) が見られるのは言語間に共通の性質と見なされている。

Palmer (2001) の言語類型論的モダリティ研究に基づく日本語と中国語のモダリティの対照研究を行った結果, この多義性は中国語のモダリティ体系には見られるが, 日本語には見られないという知見を得た (玉地, 2005)。このことは図1と図2を比較すると明らかである。例えば, 図2において, 「应该 yīnggāi」は「根源的・必然性」(Deontic necessity) と「認識的・必然性」(Epistemic necessity) を表しているが, 図1には1つ以上のモダリティを表すモーダルマーカはない。

Possibility		
Event modality		Propositional modality
Dynamic possibility (Abilitive : 可能)	Deontic possibility (Permissive : 許容)	Epistemic possibility (Speculative)
～できる ～える, ～られる	～てもいい	<u>～かもしれない</u>
Dynamic necessity (Volitive : 意思・勧誘)	Deontic necessity (Obligative : 必要妥当)	Epistemic necessity (Deductive)
～う, ～よう ～たい	～といい ～なければならない ～べきだ ～ものだ	<u>～にちがいない</u> <u>～はずだ</u>
Event modality		Propositional modality
Necessity		

図1 Palmerの理論による日本語のモーダルシステム

太字: 動詞活用形, イタリック体: 評価的複合形式,
普通字体: 助動詞, 下線字体: 助動詞相当形式

Possibility		
Event modality		Propositional modality
Dynamic possibility (Abilitive : 能力判断)	Deontic possibility (Permissive : 許可)	Epistemic possibility (Speculative : 蓋然)
能 néng, 能够 nénggòu, 会 huì, 可 kě, 可以 kěyǐ, 得 dé	能 néng, 能够 nénggòu, 可能 kěnéng 可 kě, 可以 kěyǐ	会 huì, 能 néng, 能够 nénggòu 得 dé, 可以 kěyǐ 可能 kěnéng,
Dynamic necessity (Volitive : 意思・願望)	Deontic necessity (Obligative : 必要)	Epistemic necessity (Deductive : 必然)
要 yào 需要 xūyào, 得 děi	要 yào, 该 gāi, 应该 yīnggāi, 应 yīng, 得 děi, 当 dāng, 应当 yīngdāng	该 āi, 应该 yīnggāi, 得 děi, 要 yào
Event modality		Propositional modality
Necessity		

図2 Palmerの理論による中国語のモーダルシステム

この多義性は、「根源的」モダリティと「認識的」モダリティの間で議論される。なぜなら、「根源的」モダリティは「動的」モダリティと共に「対事象的」モダリティ (event modality) に、「認識的」モダリティは「証拠性」のモダリティと共に「対命題的」モダリティ (propositional modality) という性質を異にするモダリティに分類されているからである。

言語学者はこの多義性を歴史的、社会言語学的、心理言語学的に見ても、「根源的」用法が「認識的」の意味から派生したのではなく、「認識的」用法が「根源的」の意味から派生したという見解で一致している。

Sweetser (1990) は、認知言語学的観点から「根源的」なモーダルの意味が「認識的」の領域に拡張されていると主張する。我々は一般的に外部世界で使用される言語をメタファー的に外部世界と平行して存在する内部の心理的世界に適用するからである。Sweetserは、「根源的」と「認識的」を異なる意味形式を構成するとは考えておらず、我々の社会物理学的理解の力とその力の推論の領域へのマッピングが曖昧であるからと考える。モーダルの多義性は、特定の意味を表す1つのマーカ存在あるいはその欠如では

なく、メタファー的マッピングの存在あるいは欠如によると考える。例文によって説明すると次の通りである。

例1 John must go to all the department parties.

上記の例文は次の2通りの意味に解釈され得る。

- ①「ジョンはすべての学部のパーティに出席しなければならない。」(「根源的」用法)
- ②「ジョンはすべての学部のパーティに出席するにちがいない。」(「認知的」用法)

①は話者(と／あるいは何人かの外の行為者)によって押し付けられた現実世界の力が中の主語(あるいは他の人)にある行為をさせることを意味している。②の「認知的」の世界における解釈は、MUSTはある主体によって適用された認知的な力を意味し、話者(あるいは一般の人々に)文中にあらわされた結論に達することを強いている。この「認知的」な領域における「認知的」な力は、物理的領域における強制的な義務付けに対する対象物である。「根源的」な意味と「認知的」な意味の多義性はこのように、このグループの語彙的項目の、両領域間のメタファー的マッピングの習慣化とみなされている。

この様な認知言語学的観点から中国語のモダリティ体系における多義性の存在と日本語のモダリティ体系における多義性の欠如を説明すれば、中国語母語話者はこの2つの領域の区別に対する認識が曖昧で、日本語母語話者は明確であるという違いがあると思われる。これを第2言語習得の場面に応用すると、中国語を母語とする学習者にとって、「根源的」モダリティと「認知的」モダリティの表現に別個の語彙形式を使用しなければならない日本語のモダリティの習得は難しいと考えられる。

また、この多義性が「根源的」から「認知的」が派生したことから考えると、中国語においては「根源的」用法が中核的、あるいはプロトタイプ的であり、「認知的」用法が周辺的な用法であるといえる。一方、日本語においてはどちらの用法とも同じ程度に使用されるということを意味している。

このようなマッピングによる違いから、中国人日本語学習者のモダリティの習得において予想されることは、「根源的」なモーダルマーカの方が「認知的」なモーダルマーカよりも習得しやすく、また「認知的」のモーダルマーカを使用すべき場面において

も「根源的」なモーダルマーカ―を使用するのではないかということである。

3. 中国人日本語学習者のモーダルマーカ―の習得研究からみた中国語のモーダルマーカ―の文法化の経路の再考察の必要性

先述した仮説を検証するために、筆者は中国人日本語学習者のモダリティの習得過程に関する研究を行った（玉地・堀江、発表予定）。その研究では「べきだ」と「はずだ」の習得と「なければならない」と「にちがいない」の習得に関する研究を行った。これらのモーダルマーカ―を扱ったのは、「べきだ」と「はずだ」は共に中国語では「应该 yīnggāi」という1つのモーダルマーカ―に訳され、「べきだ」はその「根源的」用法に、「はずだ」はその「認知的」用法に相当し、同様に「なければならない」は「要 yào」の「根源的」用法に、「にちがいない」は「認知的」用法に相当するからである。このように、中国語と日本語のモーダルマーカ―の対応関係が1対2で表されるモーダルマーカ―の習得の学習者の学習習熟度段階による違いを分析した。

その結果、(I)「はずだ」を正解とする問題の正解率は初級、中級、上級と学習段階が進むとともに上昇していること、(II)一方「べきだ」が正解の問題で「はずだ」を選ぶ割合は初級者より中級者において高く、上級者では減少していることが分かった。このことから、中国語母語話者の日本語のモダリティの認知過程は学習初期においては中国語の認知過程の影響を受けるが、その後中国語及び日本語母語話者のいずれとも異なる認知過程、つまり中間言語の段階、を経て日本語母語話者の認知過程に近づくと考えられる。一方、「なければならない」・「にちがいない」に関する問題については、学習者は学習初期の段階から「なければならない」と「にちがいない」を別のものと考えていることがわかった。

Slobin (1994) は、英語の現在完了の習得の調査から、習得順序と英語の現在完了の文法化経路が平行であることを示唆した。このように、文法化と習得の間には相関関係があると思われる。「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」では習得過程が異なっているということは、「べきだ」・「はずだ」と「なければならない」・「にちがいない」では文法化が異なっているということが考えられる。

「べきだ」と「はずだ」は共に古典語の「べし」から派生し、比較的早い段階で用法の分化が早く起こったために「根源的」用法には「べきだ」、「認知的」用法には「はずだ」

という別形式で表現されるようになったことが報告されている (Narrog, 2002)。また、「なければならない」と「にちがいない」については、対照言語学的研究から英語の MUSTに見られるような「根源的」用法から「認知的」用法が派生したような関係はないということが報告されている (山田 1990, 原田 1999)。したがって、学習者にとって目標言語である日本語においては文法化の研究で報告されていることが習得研究を通して確認されたということになる。

しかし、習得段階で母語による転移が見られると考えるなら、母語である中国語の「应该 yīngāi」と「要 yào」についても考慮すべきだと思われる。つまり、「应该 yīngāi」と「要 yào」の「根源的」用法と「認知的」用法の関係についてである。「根源的」から「認知的」が派生したという文法化の方向性から考えると、「べきだ」・「はずだ」の習得の学習の初期段階で見られる「べきだ」の多用は母語の影響によるものと考えられる。しかし、「なければならない」・「にちがいない」の習得に関して「べきだ」・「はずだ」の習得に見られるような過程を経ていないということは、「应该 yīngāi」と「要 yào」では文法化が異なっているのではないだろうか。つまり、「应该 yīngāi」に関しては「根源的」から「認知的」が派生したと考えられるが、「要 yào」にはそのような派生関係がないのではないかということである。

このことを調べるためには、中国語において「应该 yīngāi」と「要 yào」の使用に際して、「根源的」用法と「認知的」用法のどちらがより多く用いられるかを調査する必要がある。しかし、どちらの用法も同じ1つの言語形式を用いて表現されるということは、形式の上からどちらの用法を表現しているかを区別するのが難しいことを意味している。そこで、日本語の「べきだ」・「はずだ」、及び「なければならない」・「にちがいない」を含む文章の中国語の対訳文ではどのようなモーダルマーカ―を使って表現されるか、またそれらのモーダルマーカ―の出現頻度を調査することが有効であると思われる。

また、「应该 yīngāi」と「べきだ」・「はずだ」、「要 yào」と「なければならない」・「にちがいない」の対応関係についてであるが、これは対照言語学的方法に基づいて両言語における「翻訳的相当語句 (translational equivalence)」(Croft 2002 11)を対応させたものである。その際、Li (2003)の研究に基いて助動詞のみをモーダルマーカ―として扱ったため、助動詞の中で「なければならない」と「にちがいない」の両方の意味を有する「要 yào」と対応させたものである。ちなみに、図2の中国語のモダリティ体系もLi (2003)の見解に基づいて作成したものである。しかし、副詞を「認知的」モダリティを

表すモーダルマーカであるとする主張する研究者もいる（例：賀 1992）ように、中国語のモーダルマーカの定義については見解が一致していない。そこで、実際の対訳状況を調査することによって、中国語のモダリティ体系におけるモーダルマーカの定義（モーダルマーカを表す語彙形態の品詞性と品詞とモダリティのカテゴリーの対応関係）についての一考察を行うことも可能ではないかと思われる。

4. 研究方法と結果

研究手法は、日本語の文学作品の中国語の訳文の中で「べきだ」・「はずだ」、「なければならない」・「にちがいない」がどのモーダルマーカを用いて訳されているかを調査する。対象とする文学作品は中国語に翻訳された日本語の文学作品である。表 1, 2 はそれらの結果をまとめたものである。

表のまとめ方について説明するが、「べきだ」・「はずだ」がそれぞれ中国語のどのモーダルマーカと対訳させながら訳されているかを出現回数、及び対訳率をまとめたものである。対訳率とは、全体の出現回数において当該モーダルマーカの出現回数である。例えば、「应该 yīngāi」と「べきだ」の関係で言えば、全作品の原文中で「べきだ」が使用された回数は208回で、そのうち翻訳作品の中で「应该 yīngāi」と訳されたのは80回であった。したがって、使用回数のうち「应该 yīngāi」「應該」と訳された割合（対訳率）は38.4%となる。また、「应该 yīngāi」というモーダルマーカは「应 yīng」と「该 gāi」というそれぞれ別個のモーダルマーカから作られたものであり、これらは元来ほぼ同じ意味・機能を持つと言われている（Li, 2003, p. 167）。また、「本来应该 běnlái yīngāi」は、「应该 yīngāi」という助動詞に「本来 běnlái」という副詞が修飾したもので、同様に「本应 běnyīng」は「应 yīng」という助動詞に「本 běn」という副詞、「理该 lǐgāi」は「该 gāi」という助動詞に「理 lǐ」という副詞が修飾したものであることから、これらを「应该 yīngāi」のサブカテゴリーであると定義した。また、これらの形式の構成を明確にするために「品詞」による説明を付した。「助」は助動詞、「副」は副詞、「助+副」は助動詞と副詞から成り立つことを意味している。「小計」では、これらのサブカテゴリーを構成する形式すべてを「應該」のグループであると見なし、これらの形式すべての出現回数と対訳率をまとめている。

また、*は、「可能性」を表す助動詞を意味している。先述した図2からもわかるよう

に、「应该 yīngāi」と「要 yào」は共に「必然性」を表すモーダルマーカである。したがって、「必然性」を表すために「可能性」のマーカを使用するということは「必然性」の程度が低い、つまりより「主観性」の強い表現であることを意味していると考えられる。

表1 対訳文学作品に見る「べきだ」・「はずだ」と「应该 yīngāi」の対応関係

モーダルマーカ		品 詞	べ き		は ず	
			回 数	対訳率	回 数	対訳率
应 该	应 该	助	80	38.4	41	21.0
	该 应	助	30	14.4	30	15.3
	应 会	助	5	2.4	4	2.1
	该~会	助+助			2	1.0
	本来应	副+助	1	0.4		
	本 本 该	副+助	4	1.9	4	2.1
	本 理 该	副+助	2	0.9	3	1.5
	理 该	副+助		4	2.1	
	理 该	副+助		1	0.5	
	小 計		122	58.6	89	45.6
应 当	应 当	助	5	2.4	1	0.5
	当 当	助	1	0.4		
	应 当	副+助			1	0.5
	小 計		6	2.8	2	1.0
要	要	助	14	6.7	8	4.1
	需 要	助	1	0.4		
	必 要	副+助	1	0.4		
	小 計		16	7.6	8	4.1
*	可 以	助			5	2.6
	可 以	助			2	1.0
	会 能	助			24	12.3
	会 能	助			6	3.0
	小 計		0	0	37	18.9
副 詞	一 定	副	2	0.9	6	3.0
	肯 定	副			2	1.0
	当 然	副	2	0.9	6	3.0
	自 然	副			7	3.5
	没有理由	副+名			1	0.5
	小 計		4	1.8	22	11.0
な し			53	25.4	36	21.8
合 計			208		195	

表1からわかるように、「べきだ」も「はずだ」も約50%は「应该 yīngāi」に係る形式に対応している。「べきだ」は「应该 yīngāi」と「应当 yīngdāng」,「要 yào」に係る形式として訳される割合が高い(69%)。これらは「必然性」を表す助動詞と定義されている。

一方、「はずだ」に関しては、これらの「必然性」を表す助動詞以外に、「可 kě」「可以

表2 対訳文学作品に見る「なければならない」・「にちがいない」と「要 yào」の対応関係

		なければならない		にちがいない	
モーダルマーカ-	品 詞	回 数	対訳率	回 数	対訳率
要	要 只 要	24	19.2	1	0.1
	助 副+助			1	0.1
	小 計	24	19.2	2	0.2
应 该	应 该	10	8.0		
	应 该	1	0.8		
	本 应	9	7.2		
	副+助	2	1.6		
	小 計	22	17.6		
*	会 会	2	1.6	1	0.1
	定 可 可	1	0.8		
	可 ~ 可	1	0.8		
	无 可 非	6	4.8		
	无 得 得	1	0.8		
	不 得 不	6	4.8		
	不 能 不	6	4.8		
	不 能 不	1	0.8		
	不 能 不	6	4.8		
	不 能 不	1	0.8		
	小 計	31	24.8		
副 詞	一 定	6	4.8	36	50.0
	肯 定	2	1.6	9	12.5
	肯 定 无 疑			1	0.1
	无 疑 的			11	8.8
	无 疑 的 副	3	2.4	2	0.2
	必 须	3	2.4		
	副	2	1.6		
	小 計	16	12.8	59	81.9
な し		13	10.4	10	0.8
合 計		125		72	

kěyǐ」などの「可能性」を表す助動詞に訳されている場合も見られた。また、「一定 yídìng」「肯定 kěndìng」などの副詞に訳されている場合もあったが、「べきだ」の場合は、全体の1.8%だが、「はずだ」が副詞として訳されている場合は11%もあった。このことは、副詞も「認知的」モダリティのモーダルマーカ―として機能することを意味していると思われる。

次に「なければならない」「にちがいない」と「要 yào」の対応関係についての考察を行う。「なければならない」の対訳に関しては、他の日本語のモーダルマーカ―に比べて、対訳に用いられるモーダルマーカ―が多様であると考えられる。対訳率の最も高いものは「要 yào」であるが、全体に占める割合からいって主要なものとは言い難い。また、同じ「根源的・必然性」を表す「べきだ」には見られなかった現象として「会 huì」「可以 kěyǐ」などの「可能性」を表すモーダルマーカ―に対訳されている。このことは、「べきだ」に比べて「なければならない」の方が主観的であることを意味しているのではないだろうか。

「にちがいない」で最も対訳率の高いものは「一定 yídìng」という副詞であった。また、この対訳率は他の日本語と中国語の対訳率に比べて高いものであった。また、「一定 yídìng」以外でも「肯定 kěndìng」などの副詞が最も多く用いられている。このことは、副詞もモーダルマーカ―として機能すると考えるべきではないだろうか。

5. 文法化の経路から見た習得研究及び認知過程についての考察

(1) 「应该 yīnggāi」の文法化の経路と習得研究への提言

「应该 yīnggāi」は、「べきだ」と「はずだ」のどちらの訳においても最も多く使用されているので、「べきだ」と「はずだ」に対応する主要なマーカ―であると考えられる。2つの対訳のうち、「べきだ」の方が若干多いので、「应该 yīnggāi」の「根源的」用法と「認知的」用法では「根源的」用法のほうが主要な用法であると考えられるが、Li (2003) が主張するように「認知的」用法が周辺的であるとまではいえないと思われる。したがって、習得研究で見られた初級学習者が「べきだ」を多用するという現象は、中国語の文法化（「根源的」用法から「認知的」用法が派生）の影響だけでなく、「根源的」用法の過剰一般化（overgeneralization）をストラテジーとして利用していると考えられる。

(2) 「要 yào」の文法化の経路と習得研究への提言

「要 yào」は「なければならない」に対応する主要なマーカーであるとは考えられるが、「にちがない」に対応する主要なマーカーは「一定」であると考えられる。したがって、「要 yào」の「認識的」用法はきわめて周辺的な用法であるといえよう。

また、「なければならない」と「にちがない」の習得において、両者の区別が容易であったことは、中国語と日本語のモーダルマーカーの対応が2対2であったことから説明可能である。

以上のことから、「应该 yīngāi」と「要 yào」では文法化の経路が異なっているということがわかった。前者においては英語などの多くの言語と同様、「根源的」から「認識的」が派生したものと考えられるが、後者においては日本語と同様「根源的」と「認識的」のマーカーが分化していると考えられる。このことから認知過程を分析すると、中国語母語話者は英語母語話者と同様に外部世界で使用される言語をメタファー的に外部世界と平行して存在する内部の心理的世界に適用する方法と、日本語母語話者のように外部世界と内部心理的世界を別個のものとして認識する方法の両方を第1言語を通して習得していると考えられるのではないだろうか。

6. おわりに

以上、習得研究の結果をきっかけに、「应该 yīngāi」と「要 yào」という中国語のモーダルマーカーの文法化に関する調査を行なった。その結果、「应该 yīngāi」と「要 yào」の文法化の違いと、習得研究の結果の再考察及び中国語母語話者の認知過程の再考察を行なった。また、この調査を通して、副詞がモーダルマーカーとしての機能を果たしているということがわかり、中国語のモダリティ体系におけるモーダルマーカーの定義に対する新しい見解を得ることができたと思われる。

一次資料及び対訳文学作品

阿部公房 (1981) 砂の女 新潮社

柳呈訳 (1987) 女人 新丘文化社

井伏鱒二 (1966) 黒い雨 新潮社

柯毅文訳 (1982) 黒雨 湖南人民出版社

- 大江健三郎 (1958) 死者の奢り 文芸春秋新社
 王中忱訳 (1995) 死者的奢 光明日报社
 大岡昇平 (1972) 野火 講談社
 李東柱訳 (1978) 野火 新丘文化社
 川端康成 (1947) 雪国 新潮社
 侍桁訳 (1981) 雪国 上海訳文出版社
 島崎藤村 (1967) 破戒 新潮社
 平白訳 (1955) 破戒 平明出版社
 太宰 治 (1948) 斜陽 新潮社
 徐魯訳 (2000) 房斜 武漢出版社
 谷崎潤一郎 (1934) 痴人の愛改造社
 金光植 譯 (1962) 痴人 正音社
 夏目漱石 (1964) 坊ちゃん 偕成社
 胡毓文訳 (1989) 哥儿 人民文学出版社
 三島由紀夫 (1956) 金閣寺 新潮社
 桂明源訳 (1978) 金閣寺 三中堂文庫
 村上春樹 (1987) ノルウェイの森 上・下 講談社
 林少華訳 (1991) 威的森林 漓江出版社
 武者小路実篤 (1971) 友情 講談社
 李光洙訳 (1985) 友情 人民文学出版社

参考文献

- Croft, W. (2002) *Typology and Universals : Cambridge Textbooks in Linguistics 2nd Edition*, Cambridge University Press
- 賀陽 (1992) 「中国語の書き言葉における語気の体系」(訳・于康／成田静香)
 『語気詞と語気』(編 于康・張勤) 好文出版 157-176.
- 原田登美 (1999) モダリティ論小考 —モダリティをめぐる日本語研究の2つの動向
 言語と文化 3 : 123-136 甲南大学国際言語文化センター
- Li, R. (2003) *Modality in English and Chinese : A Typological Perspective*. Lighting Source Inc.
- Narrog, H. (2002) 'Polysemy and Indeterminacy in Modal Markers The Case of Japanese BESHU',
Journal of East Asian Linguistics 11, 123-167.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality 2nd Edition*. Cambridge University Press.
- Slobin, D. (1994) Talking perfectly. Discourse origins of the present perfect.
 in Pagliuca. W. (ed) *Perspectives on grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins
 119-133
- Sweetser, E. E. (1990) *From Etymology to Pragmatics Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.
- 玉地瑞穂 (2005) 日本語と中国語のモダリティの対照研究 : 言語類型論の観点から高松大学紀要44号 17-54
- 玉地瑞穂・堀江 薫 (発表予定) 中国人日本語学習者のモダリティ習得過程に見られる中間言語 : 意味・形式のマッピングの観点から 5th Biennial International Conference on Practical Linguistics of

Japanese 発表予稿論文集（口頭発表として原稿受理済み）

Van Patten, B. et al. (2004) *Form-Meaning Connections in Second Language Acquisition*. New Jersey.

Lawrence Erlbaum Associations, Inc.

山田小枝（1990）「モダリティ」同学社

高松大学紀要
第 45 号

平成18年 3月25日 印刷
平成18年 3月28日 発行

編集発行 高松大学
高松短期大学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811